

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 21号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成
二十五
年九
月
第
二十一
号

< 2013年 9月 >

古賀 順子

ル・アン美術館の印象派展「眩い水の反射」

9月9日、パリには珍しく一日中激しい雨が降り、一挙に気温が下がりました。2006年来の猛暑を記録したフランスの夏でしたが、落ち葉に吹く風もひんやりとしてきました。学校も新学期、バカンスを終えたパリの日常生活が再開です。そんな初秋の一日、曇り空のル・アンへ日帰りの遠足に出掛けました。

パリから西へ140kmほどの街ル・アン。パリ・サン＝ラザール駅から列車で1時間10分の距離です。SNCFル・アン駅を降り、まっすぐ下るジャンヌ・ダルク通りを進みます。中世の城壁の一部「ジャンヌ・ダルクの塔」を見て、今回の目的である印象派展「眩い水の反射」へ急ぎました。

クロード・モネ(1840-1926)の作品を中心に、ブーダン、ヨンキント、シスレー、ルノワール、カイユボットなど合計100点を超える「水」をテーマにした展覧会で、4月29日から9月30日までの長い展示です。印象派の画家たちが好んで描いたセーヌの流れ、そのセーヌ河沿いの街や村、水に浮かぶ小舟、河に架けられた橋。輝く光に反射する「水」に映る風景が、季節ごとに時間を追って描かれています。

1870年、モネはカミーユ・ドンシュエと結婚します。有名な「日傘の女」のモデルを務めた女性で、二人の間にはジャンとミシェルが生まれます。とても貧困でしたが、カミーユとの幸せな家庭生活を送った時期です。お金に困り(モネが有名になり絵が売れ裕福になるのは1880年代後半から)、パリを離れ、セーヌ河沿いのアルジャントウユ(1873-1878)、ヴェトウユ(1879-1881)、ポワシー(1882)と引越しを重ね、1883年からジベルニーに住み始めます。1870年代から1880

年代は印象派の開花期です。転々と住いを取りながらもモネが描いたのは、セーヌ河に架かる鉄橋(当時、鉄は最新の建材でした)、パリからセーヌ河沿いを走る機関車など、新しい時代の風景です。印象派の画家たちは、新しい時代の技術を絵画に重ねてみていたのです。そして、新しい時代を象徴するもう一つの芸術が写真です。1880年代リュミエール兄弟がガラス乾板による写真技術を開発すると、写真が広く一般に普及します。印象派の時代と重なります。「水」をテーマに、絵画と写真が並列された当時の新しい社会を偲ばせる展覧会です。1879年カミーユが死去、息子2人と後の再婚相手となるアリスとその6人の子供たちとの大家族生活がジベルニーで始まります。貧乏生活を抜け出し、名声と富を得たモネが1890年代に連作として描いた「ル・アン大聖堂」も展示されています。

歴史的に見れば、ル・アンはジャンヌ・ダルク最期の地でもあります。美術館を出て、ジャンヌ・ダルクが1431年火刑に処された跡地に建つ「聖ジャンヌ・ダルク教会」まで歩きました。ノルマンディー地方特有のスレート屋根に、木材とコンクリートで建てられた面白い形の教会で、世界大戦の爆撃を免れた16世紀のステンドグラスが収めてあります。とても美しいステンドグラスです。ジャンヌ・ダルクが処刑されたのは5月31日ですが、怪しい黒雲が流れる秋の空はジャンヌ・ダルクの魂を連想させるような不安な雰囲気でした。

今年に入り、ル・アン、ジベルニー、オンフルールなど、セーヌ河を何度も行き来する機会がありました。ゆったりと流れるセーヌ河に、水際まで豊かな木々の緑が映る様子は、画家でなくても、私たち一般の人間にも自然の力を感じさせてくれます。穏やかな海が人間の始まりと太古の時代を感じさせてくれるとすれば、セーヌの流れは、水と生きることの喜びを教えてくれるような気がします。